

日本文学の英訳を和訳すれば

What Happens if We Translate an English Translation
back into Japanese?

郡山 直

KORIYAMA Naoshi

Abstract:

I have been interested in translating Japanese literature into English. In 1981 I started to co-translate some modern Japanese poetry into English with Edward Lueders, my former English teacher at the University of New Mexico (1950-51), and we published the result of our collaboration, *Like Underground Water: The Poetry of Mid-Twentieth Century Japan* with Copper Canyon Press in 1995. Then I started to translate stories from *Konjaku Monogatari Shu* into English around 2005, and I asked Professor Bruce Allen of Seisen University to collaborate with me, smoothing out my original translations. Ninety Japanese tales we have co-translated will be published under the title of *Japanese Tales from Times Past* by Tuttle Publishing in August, 2015. While working on this latest project, an idea occurred to me, "What will happen if I translate the English translation of *Konjaku Monogatari* back into Japanese?" I thought it must be interesting to see the difference between the Japanese originals and my Japanese translations of the English translations of the stories from *Konjaku Monogatari*. "The closer to the originals the retranslations are in form and feelings, the better they must be," I thought. And I thought it would be interesting to write a paper on this theme. I know my knowledge and reading are very much limited, but, I think no one has ever written this kind of paper. In this paper, the reader will see various problems and points involved in the art of translation.

Key words: the difference, Japanese originals, English translations,
Konjaku Monogatari Shu 違い、日本語の原典、英訳、『今昔物語集』

我々はぜんぜん知らない言語で書かれている文学を知るためには翻訳に頼るほかはない。翻訳は知らない原語で書かれた文学を一般読者に届けるという極めて重要な機能を持っている。しかし生活、習慣、国民性、宗教などなど、全ての面で異なっている文化で生まれた文学を翻訳することには大きな困難を伴う。翻訳は原作に忠実であるべきであるが、時には思い切って、書き直したり、省略したりしなければならないこともある。翻訳不可能な単語が出てくることもある。翻訳はこのように困難を伴うものではあるが、また極めて興味深い作業でもある。つまり一つの文学作品がまったく別の言語で変装して、新しい

姿で目の前に現れてくるからだ。私は十年ほど前から『今昔物語』の面白い説話を選んでその英訳をしてきた。その九十篇が此のたび米国のタトル社から八月に *Japanese Tales from Times Past* という題名で出版されることになった。私が小学館の『日本古典文学全集』の『今昔物語集』を原典として英訳したものを清泉女子大学のブルース・アレン教授が手を加えて仕上げたものである。国際融合文化学会が論文の原稿を募集していることを知り、自分の『今昔物語』の英訳を日本語に翻訳したら一体どんな日本語になるか、試してみたい、と思った。つまり『今昔物語』の原作と、自分の英訳を自分で和訳したものがどれだけ似ているか、あるいはどんなふうには違っているかを調べて見たいと思った。日本語の原典の英訳を更に和訳して、原典とその英訳の和訳を比較するという実に奇妙な作業は、誰も今までにやったことのなさそうな調査だと思って書いてみた。時間と労力をかけて英訳した古典文学が、どんな感じの文章になっているかを、もう一度日本語で確認してみたいと思ったのだ。この作業の過程で、誤訳も、思い違いも、飛躍しすぎた書き換えも、見事な名訳も、奇妙な迷訳も、発見できるだろうと思ったのだ。思い切って省略したほうが読みやすい文章になる単語もある。ここに掲載する日本語は、あくまでも英訳を忠実に和訳したものであり『今昔物語』の原典を現代語訳したものではない。数多い興味深い説話のなかから、卷二十四、第三十五話の『在原業平中將東の方に行きて和歌を読む語』を取り上げた。この物語は『東下り』という題で『伊勢物語』にも出ている有名な物語だ。

むかし在原の業平という名前の男がいた。彼は女好きとして有名だった。ところが、彼は自己を価値のないもの——この世に生きてゆく価値のないもの——と思い込み、もう京都に住むべきではない、と決めた。国の東の方には住むべき所があるかも知れないと思って、信用できる家来を二人連れて旅に出かけた。彼らのうち、誰も道をよく知らなかった。だから旅しているうちに、彼らはときどき、道に迷うこともあった。

いくらか行った後、参河みかわの国の「八橋」という所に着いた。そこが「八橋」といわれているのは、その川があらゆる方向に分岐していて、八つの橋がかけられていたからだ。川縁には木が生えていて木陰があった。そこで業平は馬から下りて、すわり、乾かした米の食事を取った。川の両岸には「アイリス」が美しく咲き誇っていた。すると連れもの者たちがア、イ、リ、スの四文字を句の頭につけて詩を作ってみたら、と提案した。そこで業平はつぎのように詩を書いた。

愛する妻と

一緒に暮らしていたが、彼女を残して

陸路を旅して

すごく遠くまで来たものだ

(注：これは各行の頭にア、イ、リ、スを据えて四行詩にしてある)

するとこの詩を聞いた男たちは深く感動し涙を流した。彼らの涙は乾かした米の食事の上に落ちて、それを濡らし湿っぽくした。

そこを離れて彼らは長いあいだ旅をして、駿河の国に到着した。彼らは宇津という山に登ろうとしていた。道は暗く、不安な気持ちになった。蔦や楓かえでの木が茂り、道はうら寂しく見えた。業平が、『なんとひどい道を行かなければならないのか』と思っていると、偶然、一人の僧に出会った。よく見ると、その僧は京都で知り合っていた人であった。僧は業平を見て、こんなところで会うなんて珍しいことだ、と思い、『いったい、どうして貴方はこんなところを旅しているのですか』と尋ねた。業平は馬から下りて詩を書いて、それを京都にいる妻に届けてくれと頼んだ。その詩にはこう書かれていた。

駿河の国の

宇津山うつやままで

はるばるやってきた

君に会いたい

夢でも現うつでも君には会えない

それから旅を続けて、五月の終わりにも深い雪を白く頂いた富士山に近づいた。その山を、見て業平は詩を作った。

富士山は季節を

気にしない

その山はいま何の季節と思っているのだろうか

雪で

小鹿のように斑まだらもよう模様

富士山は比叡山を二十ほど重ねたような大きな山だ。形は塩を積み上げたよう。彼らはまだ旅を続けて行って、ついに武蔵の国と下総の国の間の大きな川まで来た。川の土手に座って、続けてきた長旅を振り返り、『なんと遠くまで来たことか』と思った。彼らが長旅を追憶している間に、船頭が叫んだ。『急ぎたまえ。早く舟に乗りたまえ。日が暮れます』。それで彼らは舟に乗った。舟に乗っている間、彼ら

は京都に残してきた人のことを思い出し、恋しがった。そのとき、シギほどの大きさで、嘴と脚が赤い白い鳥が飛び回り魚を捕っているが見えた。業平は船頭に『あの鳥はなんという鳥かね』と尋ねた。船頭は『あの鳥はミヤコドリですよ』と答えた。これを聞いて、業平はこのように詩を書いた。

君たちがミヤコドリという鳥なら
 質問したい
 都にいる愛しい人は
 元気で
 うまく暮らしているかと

これを聞いて、舟に乗っている人々は深く感動し、涙を流した。業平は優れた歌人だったといわれている。そしてこの物語はこのように言い伝えられてきたのである。

巻第二十四、第三十五話

原典を開いてみると物語の題は『在原業平中将東の方に行って和歌を読む語』となっているので私の英訳は訳しにくい言葉「中将」をすっかり省略した。ここの「中将」は軍隊の中将でもなく訳しにくい言葉だ。このような言葉は思い切って省略したほうが訳としては読み易い。翻訳はすらすら読めるほうが良い、と思う。読み易くするためには省略も必要である。

私の上記の文章で一番問題なのは、「アイリス」という英語が出てきていることであろう。原典には『^{かきつばた}劇草ト云フ五文字ヲ、^い句の^{いつも}頭^じ毎ニ居ヘテ、^く旅ノ^{かしらごと}心^すノ^{たび}和歌ヲ^{こころ}読メ』ト云ケレバ、^{なりひら}業平此ク^か読ケリ、^{よみ}となっている。『カキツバタの五文字を句の頭につけて和歌を読め』ということであるが、『カキツバタ』の ka, ki, tsu, ba, ta を句の頭につけて、この和歌を英訳するのは困難なので、思い切ってカキツバタを“I, R, I, S,”としてこの和歌を四行詩にしたのである。厳密には、カキツバタは沢山咲いていたので“IRISES”と複数にすべきであろうが、そうすると六文字になってしまうので、単数形 IRIS 四文字にして和歌を四行詩に英訳してみた。『カキツバタ』をローマ字で“kakitsubata”と表記して、いろいろ説明して英訳するより、『カキツバタ』を直接“IRIS”として英訳したのだが、そのほうが翻訳しやすく、かつ読み易い訳になったと思う。しかし、この意見には反論も予想される。上記の「英訳の和訳」では『すると連れもの者たちがア、イ、リ、スの四文字を句の頭につけて詩を作ってみたら、と提案した』となっている。原文の『^{かきつばた}劇草』をいきなり英語の「アイリス」で置き換えたことは、やはり、むりだったようにも思える。「アイリス」が四文字なので原文の「五文字」を私が勝手に「四文字」とした点にも注目して

頂きたい。また、この論文を書きながら、いま気付いたのであるが「旅ノ心ノ和歌」の「旅ノ心ノ」という重要な言葉が抜けている。これは不注意による残念な見落としである。十分気を付けていても、翻訳ではこのようなミスは起きてしまう。また原文の「和歌」をただ“a poem”と英訳してあるが、やはり「和歌」は“a waka poem”あるいは“a tanka poem”として脚注を付けるべきだった、と思う。原典の題『在原業平中将東の方へ行って和歌を読む語』を私は“Arihara no Narihira Composes Tanka Poems on His Trip East”と訳し、原典の最後の行を“It is said that Narihira was such an excellent tanka poet”と訳してある。つまり、和歌を“waka poems”と訳さず、あえて“tanka poems”とした。私はどちらにしようか、さんざん迷ったのであるが、現代の米国の、いや世界の人々にとって、“waka”よりは“tanka”の方が広く通用しているので、あえて“tanka”とすることにした。これについても多くの人から反対意見がでると思う。しかし、たしか1980年代に米国南西部のユタ州で高校生を対象に英語の“Tanka Contest”があったことを覚えている。“tanka”は米国の高校生にも、よく知られている言葉である。米国の詩人の間では“tanka”を書く詩人の団体もいくつか存在している。“waka”という言葉よりは“tanka”のほうが、若い人々にとっても、理解し易いと思って、「和歌」をあえて“tanka poems”と訳した。

翻訳という作業は考えてみると、深い考慮、絶えざる書き直し、が望まれる作業である。余談になるが、私はいま唐や宋の時代の中国詩を英訳しているが、一つの詩篇を英訳するのに、もうこれで完全だ、と思うことはない。読み直しているうちに、あちこち書き直したくなり、翻訳の作業には終わりは無いように思われる。

さて、この論文には参考資料として『今昔物語』の原典と、英訳を添付する必要があると思うので添付した。

ありはらのなりひらのちゆうじょうあずまのかたにゆきてわかをよむ こと
在原業平中将行東方読和歌語

いまはむかし ありはらのなりひらのちゆうじょう いふひとあり よ もの あり
 今昔、在原業平中将ト云人^{あり}有ケリ。世ノ〔 〕者^{あり}ニテナム有ケル (注: [色好み])
 しか りん 然ルニ、身ヲ要無キ者^{あり}ニ思ヒ成シテ、「京ニハ不居ジ」ト思ヒ取テ、東ノ方ニ、「可住キ
 ところ ある 所ヤ有」トテ行ケリ。本ヨリ得意ト有ケル人一人ヲ伴ナヒテ、道知レル人モ無クテ、
 まど ゆき 迷ヒ行ケリ。
 しかるあいだ みかは くに やつはし いふところ いたり そこ やつはし いひ やう かは みずいで くもで なり
 而 間、参河ノ国ニ八橋ト云所ニ至ヌ。其ヲ八橋ト云ケル様ハ、河ノ水出テ、蜘蛛也
 はし や わたし より やつはし いひ なり そのさわ ほとり こかげ あり なりひら おり
 ケレバ橋ヲ八ツ渡ケルニ依テ、八橋トハ云ケル也。其沢ノ辺ニ木隠ノ有ケル、業平下リ
 居テ

かゝいひくひ 餉 食ケルニ、おがわ ほとり かきつばた 劇草 [おもしろ]ク榮タルヲ見テ、具シタリケル人々ノ云ク、
「かきつばた 劇草ト云フ五字文ヲ、句の頭 毎ニ居ヘテ、旅ノ心ノ和歌ヲ読メ」ト云ケレバ、業平此
ク読ケリ、

カラコロモキツツナレニシツマシアレバハルバルキヌルタビヲシラゾオモフ

ト。人々此レヲ聞テ、哀レニ思テ泣ニケリ。餉ノ上ニ涙落テ、ホトビニケリ。
其ヲ立テ眇々ト行々テ、駿河国ニ至ヌ。ウツノ山ト云山ニ入ラムト為ルニ、我が入ラ
ムト為ル道ハ糸暗シ、心細キ事無 限リ。絡石鶏冠ノ木繁テ物哀レ也。「此クスズロナ
ル事ヲ見ル事」ト思フ程ニ、一人ノ修行ノ僧会タリ。此レヲ見レバ、京ニテ見知タル人
也ケリ。僧業平ヲ見テ、奇異ニ思テ云ク、「此ル道ヲバ何デ御座ゾ」ト。業平 其下居テ、
京ニ其人ノ許ニ文ヲ書テ付ク、

スルガナルウツノ山ベノウツツニモユメニモ人ニアハヌナリケリ

ト。其ヨリ行々キ、富士ノ山ヲ見レバ、五月ノ晦日ニ、雪糸高ク降タルニ、白ク見ユ。其レ
ヲ見テ、業平此ク読ケリ、

トキシラヌ山ハフジノネイツトテカカノコマダラニユキノフルラム

ト。其ノ山ハ此ニ譬ヘバ、比叡山ヲ二十重上タル許ノ山也。ナリハシホジリノ様ニゾ有
ル。

尚行々テ、武蔵国ト下総国トノ中ニ大キナル河有リ、其ヲ角田河ト云、其河辺ニ打群居
テ思遣レバ、「無 限リ遠ク来ニケルカナ」ト佗思ヘルニ、渡守、「早ク船ニ乗レ。日暮レ
ヌ」ト云エバ、乗テ渡ラムト為ル程ニ、皆人京ニ思フ人無キニシモ非デ佗思ケリ。而ル
間、水ノ上嶋ノ大キサ有ル白キ鳥ノ、鶯足トハ赤キ、遊ツツ魚ヲ食フ。京ニハ更ニ
不 見ヘ鳥ナレバ、人モ不見知。渡守ニ、「彼レハ何鳥トカ云フ」ト問ヘバ、渡守、「彼レ
ヲバ都鳥ト云」ト云ケレバ、業平此レヲ聞テ此ナム読ケル、

ナニシオハバイザコトトハム都ドリワガオモフヒトハアリヤナシヤト

船ノ人皆此レヲ聞テ、拳テナム泣ケル。

此ノ業平ハ此様ニシ和歌ヲ微妙ク読ケル、トナム語り伝ヘタルトヤ。

Arihara no Narihira Composes Tanka Poems on His Trip East

In olden times there lived a man named Arihara no Narihira. He was well-known as a womanizer.

Narihira, however, considered himself worthless—not worth living in this world—so he decided he should no longer live in Kyoto. He thought there might be a place for him to live in the eastern part of the country, so he took a couple of his trusted men and set off on a journey. None of them knew the way very well, and so as they travelled they lost their way from time to time.

After some time they arrived at a place called “Eight Bridges” in the province of Mikawa. It was called “Eight Bridges” because the river branched off in different directions and there were eight bridges over it. There was shade under the trees on the riverbank. There Narihira dismounted from his horse, sat down, and ate his meal of dried rice. Along the side of the river there were irises blooming beautifully, so the men accompanying him proposed that he compose a poem using the four letters, I, R, I, S, at the beginning of each line. And so Narihira wrote a poem as follows:

*I left my longtime wife
Remaining at home.
I now think on how it is
Such a long journey I have made..*

The men who heard the poem were deeply impressed and shed tears. Their tears dropped onto their meal of dried rice such that it became wet and soggy.

Leaving that place, they travelled for a long distance on their way and arrived in the province of Suruga. They were about to go up a mountain called Mt. Utsu. The road was dark and they felt terribly apprehensive. Ivy vines and maple trees grew rank and the road looked dreary. While Narihira was thinking, “What a terrible road we have to take,” quite unexpectedly, he met a monk. Looking at him carefully, it turned out that the monk was someone he had known in Kyoto. The monk looked at Narihira and thought it strange to find him so unexpectedly in such a place. “Why on earth are you travelling here?” he asked. Narihira dismounted from his horse and wrote a poem and then asked the monk to take it to his wife in Kyoto. The poem read:

*I've come as far as Mt. Utsu
of Suruga Province.
I've been longing to see you,
but I cannot see you,
either in reality or in dream.*

From there they continued on their way. They approached Mt. Fuji, white with snow piled high at the end of May. Looking at the mountain, Narihira composed a poem:

*Mt. Fuji doesn't care
about seasons.
What season does the mountain think it is?
It is speckled like a fawn
with snow.*

Mt. Fuji is as big as twenty Mt. Hieis piled one on top of another. Its shape is like a pile of salt.

Still they pushed on farther, and eventually they came to a large river between Musashi and Shimotsuke Provinces, called the Sumida River. They sat on the bank of the river and thought about the long journey they had taken. "How far we have come," they mused. While reminiscing about their long journey, the boatman called out to them, "Hurry up! Get on board quick. The sun is setting." So they got on the boat, and while riding on it they thought of the people they had left in Kyoto, longing for them. Then they saw some white birds, as large as longbills, with red bills and legs, hovering and hunting for fish.

Narihira asked the boatman, "What do you call those birds?" The boatman replied, "Those are called 'capital birds.'" Hearing this, Narihira wrote a poem:

*As you are called 'capital birds,'
let me ask you a question,
"Is the person I love in Kyoto
well,
and getting along all right?"*

Hearing this, the people on the boat were deeply moved and brought to tears. It is said that Narihira was such an excellent tanka poet. And such then is the story as it has been handed down to us.